

自分と違って相手も間違っているわけじゃない

ゴールデンウィークが終わり、いよいよ本格的な学校生活がスタートしました。学級や部活動での新しい人間関係はうまくいっているでしょうか。いつも意見がぶつかってしまう人、どうしても気の合わない人、これという原因があるのではないけど気づまりな人……。有名なオーストリア出身の心理学者・精神科医アルフレッド・アドラーは「すべての悩みは、人間関係の悩みである」と言いました。よく考えてみると、まさにその通りでした。

和田裕美さんという、実業家、経営コンサルタント、著述家、テレビ番組に出演したりYouTubeに動画を投稿したりしている人がいます。和田さんの書いた「15歳から学ぶ『陽転思考』のきほん」では、人間は、それぞれが別々の「国」のような存在だと例えています。「国」にはそれぞれの法律や規則があり、宗教だって違います。自分が相手のやり方を間違っていると思っても、相手の国ではそれが当たり前であって、自分のやり方のほうが相手から見たらおかしなものに思えるかもしれません。人は、それぞれいろんな価値観をもっているのです。好きなタレントも好きなゲームも好きなスポーツも好きな食べ物も好きな人のタイプも、みんなお互いに違います。これが人と人の関係であり、「自分と違うからって、相手が間違っているわけじゃ決してない。ただ、君と相手が違うだけ」

日本の学校生活は、このことを自然に学べるような仕組みになっています。自分と違う、いろいろな個性をもった人と一緒に学校生活を送ることは、社会生活を送るうえで、とても大切な経験となり「生きる力」となります。もう数年も前のことですが、日本の小・中学校で数年間英語を教えた経験があり、日本の学校のことをよく知っているオーストラリア人と話をする機会がありました。オーストラリアの中学校には学級というものが存在しません。自分が受ける授業の時にその教科の教室に移動するだけなので、教科ごとにメンバーが変わるし、自分の学級、担任の先生というものがありません。「〇年生の生徒」、「〇年の卒業生」というだけです。もちろん仲のよい友だち同士で協力して何かをやるということはありますが、そうでない人とはほとんど協力して何かやるという機会がありません。学級全体で一致団結して行事に取り組むとか、学級全体で評価されたり叱られたりするということはまずありません。

朝・帰りの会があって、同じ服を着て、同じ授業を受けて、同じ給食を食べる。よいかどうかはともかく、「〇組は成績がよい」「〇組はうるさい」というふうに学級単位で評価される。道徳や学級活動という授業があって、クラスで起こった問題について話し合ったりする。運動会では、自分のクラスを必死になって応援する。合唱コンクールでみんなが心を一つにする。このような日本の学校のシステムをうらやましいと何度となく繰り返して言いました。

「日本の学校には、勉強の得意な人苦手な人、運動の得意な人苦手な人、よくしゃべる人無口な人、絵の上手な人、字の上手な人、歌がうまい人、その人がいるだけでほのぼのする人、みんながアッと驚くアイデアを出す人、給食を本当においしそうに食べられる人、声の大きな人、困っている人をほおっておけない人、掃除を黙々とできる人……みんな同じ教室にいます。三十人いれば、三十通りの個性があって、みんなそれなりの長所と欠点を持っていて、泣いたり笑ったり、けんかしたりしています。お互いに助け合いながら、主役と脇役を交代しながら、お互いに学びあうからこそ学校に来る意味があるんです。仲のいい子も悪い子も一緒に勉強するから意味があるんです。同じタイプの子ばかり、仲のいい子ばかりでは学校に行く価値は減ってしまいますね。」